

暗闇に一筋の光が差し込む。その瞬間、舞台は星空のごとく輝き、会場には張り詰めた緊張感が漂った。スポットライトの先に浮かび上がるダークスーツの男。彼はヴァイオリンを手にし、期待に満ちた拍手の中、静かに中央へと進む。深々と頭を下げた後、長い髪を振り、左肩に楽器を構えた。神聖な弓を持ち直し、高音弦に軽く触れて調弦を済ませると、~~不~~意に険しい表情を浮かべ、~~十~~番軽快な旋律が響き渡る。

それは、形なき真理の顕現だった。旋律は徐々に輝きを増し、聴衆の心を満たしていく。従来のヴァイオリン演奏の概念を覆すような芸術美がそこにあった。純正律の澄んだ和音を奏でる指は指板を自在に滑り、隣の指で弦を弾く妙技がさらなる驚きを生む。

(これは……)

聴衆は息を呑み、狐につままれたように驚嘆する。高音の柔らかな変奏がホールに溶け込み、過去の悲しみや苦しみを浄化するかのように響く。彼のヴァイオリン「イル・カローネ」から紡がれる音は、彼自身の辛苦の結晶であった。甘美で華麗、軽やかで輝く音色が、~~観~~審聴衆の心を静寂へと誘う。

彼は幼少の頃から、~~も~~音楽に~~人~~人生身を捧げてきた。貧しい家庭環境、~~む~~ごい父親の指導方針、孤独な練習、才能をねたむ周囲の視線。すべてを乗り越え~~た~~今、彼はここに立つて

いる。しかし、彼の心にはまだ拭えぬ影があった。「悪魔」と呼ばれることへの苦悩。それは単なる称賛なのか、それとも畏怖なのか。弓を握る手に微かな震えが走る。だが、一度音が響けば、彼の**世界音楽**は次第に**彩色の音楽そのもの**世界へと化した。

やがて力強い重音、素早い三連符の連鎖が響く。わずか五分間の演奏に凝縮された技巧と魂の叫び。悪魔的技巧と評される超絶的な演奏は、聴衆の**感電**心を揺さぶり続ける。彼が奏でた**最後の親しまれている**カブリッチョ（奇想曲）は、まるで淡く響く言葉のようだった。

（悪魔など**まじにはいない**いるものか。あるのは俺の魂の叫びだけだ。なぜ俺が悪魔と呼ばれねばならない？）

その疑念を暴くける者は誰もいなかった。彼の表情は無へと沈み、やがて冷淡な笑みへと変わる。スポットライトが彼の顔を再び鮮明に浮かび上がらせると、**観客聴衆**は思わず息を呑んだ。**まもなく彼の顔には悪魔の微笑みのまじりに**じみ出し、**まじには彼に対する**畏怖と推し量れない神秘が宿っていた。

透明な空間に鐘のようなハーモニクスが響き、沈静の祈りが魂に降り注ぐ。指板上を滑るポルタメントは甘美な彩りを添え、変幻自在のバリエーションが聴衆を魅了する。三度と十度の重音が織りなす響きが、純正律の澄んだ美しさを極限まで高め**めている**。

観客聴衆の中には涙を流す者もいた。音楽評論家が無言でメモを取る一方、若きヴァイオリニストたちは目を輝かせ、その技巧を懸命に脳裏に焼き付けようとしていた。ある者は呆然とし、またある者は震える手で胸を押さえながら、その旋律の余韻に浸っていた。

音の波が押し寄せ、観客聴衆は戦慄する。最後のアルペジオが駆け巡ると、ホールは熱狂の渦へと化し転じた。立ち上がって歓声を上げる者はや興奮のあまり口論を始める者までが現れた。

この瞬間に立ち会った音楽関係者たちもまた、衝撃を隠せなかった。彼の技巧を賛美する者、演奏の過剰さを批判する者。だが、ただ一つ確かなことがある。彼が悪魔と呼ばれていたのは、その超越的な技巧と演奏が、常識の枠を超え常軌を逸していたからにほかならないである。

舞台袖に戻った彼は、深く息を吐いた。歓声がまだ遠く響く中、彼はそつとヴァイオリンをケースに収める。未この先の公演でも未、彼はこの名器とともに悪魔と呼ばれ続けるのだろう。だが、それがどうしたというかだ。彼の音楽がそのすべてを物語に応えているすいうではないか。それだけで十分なはずなのだ。